



みどころ

台湾の東海岸にある「花蓮」は美しい都市だったが、台湾にはホントに「鯨の消えた入江」があるの？台北に住む阿翔は香港からやってきた傷心の天宇に対して、自信タップリに「案内してやる」と宣言したが、それはなぜ？

中国語の勉強が済んでいる私は、原題の「我在這裡等你」の意味がわかるが、英題の「A Balloon's Landing」は一体ナニ？

回想シーンを多用して、「香港と台湾を手紙でつないだ真夏の奇跡」を描いた本作の解釈は難しいが、ロードムービーとしての展開は爽やか。日本では到底無理だが、台湾ならきっと「鯨が消えた入江」を発見することも可能！？

■□■なるほどの邦題と英題、なるほどの原題と主題歌に注目！■□■

本作のチラシには、「香港と台湾 一通の手紙がつないだ真夏の奇跡 信じることの尊さを描いたロードムービーの傑作」、「そこは、二人だけの楽園」、「忘れられない 夏になる。」の見出しが躍っている。また、そこでひときわ目につき、覚えてしまうフレーズが邦題とされている「鯨が消えた入江」だ。そんな入江が本当にあるの？誰でもそう思うはずだが。私も素晴らしい観光体験をした、四方とりわけ東方を美しい海岸線や入江に囲まれた台湾ならそれもあり！？

そう思いながら、中国語の勉強が少しずつ進んでいる私は、原題の「我在這裡等你」にも注目！この原題は「私はここで君を待っている」という意味であることは私にもすぐにわかるから、なるほど、なるほどと思いつつ、自分にもご褒美を！また、本作では劇中歌として、アイドル歌手時代のレスリー・チャンが歌った『春夏秋冬』が登場してくるので、それにも注目！これはレスリー・チャンが出演した映画『ブエノスアイレス』(97年) (『シネマ5』234頁)の主題歌だが、その曲が本作で歌われるのは一体なぜ？さらに、本作ラス

トには、男性歌手 HUSH が歌う本作の主題歌「我在原地等你 (Here I Wait)」が日本語の歌詞字幕付きで歌われるので、しっかり覚えたい。

■□■英題の意味は？なぜレスリー・チャンの姿が随所に？■□■

他方、本作の英題は「A Balloon's Landing」だが、これは一体ナニ？それは、どうやら 2003 年に亡くなった（自殺した）香港の大スター・レスリー・チャンがアイドル時代に歌って大ヒットした「春夏秋冬」の英語タイトル「A Balloon's Journey」と関連しているらしい。

本作導入部では、台北に住んでいる鍾阿翔（ゾン・アシャン）（范少勳／フェンディ・ファン）の部屋の壁に、『星月童話（もう一度逢いたくて）』（99 年）、『烈火青春』（82 年）等の映画のポスターや『春夏秋冬』の歌詞がところ狭しと貼られているので、彼がレスリー・チャンの大ファンであることがよくわかる。本作の挿入歌としても使われている『春夏秋冬』の英語タイトルは『A Balloon's Journey』だから、英題の「A Balloon's Landing」は、きっとそこから取ったもの・・・？

なお、本作ラストでは、2025 年にレスリー・チャンのコンサートが開催されることが大々的に宣伝されているが、彼は 2003 年に亡くなっているから、これは真っ赤なウソ！本作に再三挿入される回想シーンを観ていると、辻褄の合わないことが山ほど登場してくるので、私の頭は大混乱だが、どうやら本作はそれも想定範囲内らしい。2025 年のレスリー・チャンのコンサートはその最たるものだが、本作はなぜそんな真っ赤なウソをあえて登場させているの？

■□■クジラが消えた入江とは？■□■

本作は冒頭、香港の若手人作家・顧天宇（グー・ティエンユウ）（劉俊謙／テレンス・ラウ）が発表した新作小説に盗作の疑いをかけられて炎上してしまう中、癒しを求めて台湾へ赴くシークエンスから始まる。台北にやってきた天宇が繁華街で酒を大量に飲まされて酔いつぶれてチンピラに襲われていたところを、阿翔に助けってもらったところ、天宇から「クジラが消えた入江を知っているか？」と聞かれた阿翔が「知っている」「案内してやる」と答えたところから 2 人のロードムービーが始まっていく。しかし、私も訪れたことのある花蓮をはじめとして、いくら台湾の東海岸が美しい海岸線に恵まれているといっても、本当に「鯨が消えた入江（鯨逝灣／ジンジーワン）」があるの？ひょっとして、阿翔は天宇が香港からやってきた有名人だと分かったために、台北のチンピラ連中と同じく、金目当てで天宇に近づき、「鯨が消えた入江」に連れて行ってやると見えすぎたウソをついて、天宇から身ぐるみ剥いでやろうと狙っているのでは・・・？

■□■文通の開始は 2003 年！そのお相手は金潤發！しかし？■□■

本作の主演は、香港の若手人気作家・天宇だが、スクリーン上ではチンピラ役として登場する阿翔が大きな存在感を発揮するとともに、ストーリー形成上は天宇が 2003 年から文通を開始したという少年・金潤發（ジン・フンファー）が大きな存在感を発揮するので、

それに注目！幼い頃に父親から児童虐待を受けていた金潤發は児童養護施設で過ごしていたが、天宇との文通が始まる中で、台北に養親ができたため、彼は名前を阿翔と改め、1人で台北へ行くことに。他方、新作小説の盗作疑惑から逃れるように天宇が1人で台北に旅立つ冒頭のストーリーは2020年夏のことから、アレレ、アレレ。話のつじつまは？

また、台北の繁華街での乱闘騒ぎの中で天宇を助けた阿翔は、確かに阿翔と名乗り、天宇を「鯨が消えた入江」に連れて行くと約束し、リムジンではないもののバイクの後部に天宇を乗せて「鯨が消えた入江」に向かって出発したから、阿翔の話はまんざら嘘ではなさそうだ。しかし、天宇と金潤發の文通上だけに登場していた「鯨が消えた入江」を、なぜ阿翔が知っているの？

そんな疑問もあるが、スクリーン上ではまさに2人の若者による台湾ロードムービーが展開！そして、「鯨が消えた入江」に到着した天宇は一人その崖の上に登っていったが、実はそこは「鯨が消えた入江」ではなかったらしい。なぜなら、そこには地元住民で組織された「自殺防止のボランティア団体」が、今にも飛び降り自殺をしようとする天宇（？）を大声で止める、バラエティー色豊かな脱線ストーリーになっていくからだ。ホントらしくてインチキ臭い、またインチキ臭くて本気色もいっぱい阿翔の話は、一体どこまでホントなの？阿翔は本気で天宇を「鯨が消えた入江」に案内しているの？

■花火大会はホンモノ？夏夏との出会いもホンモノ？■

日本では花火大会が至るところで夏の風物詩だが、それは台湾でも同じ。したがって、ある事情でバイクからベンツに、またベンツから列車に乗り換えながら目的地の「鯨が消えた入江」に向かっていた天宇が、列車の中で見た看板を頼りに「花火大会に寄って行こう」と阿翔を誘うと、阿翔は二つ返事でOK。そればかりか、阿翔が連れて行った花火大会の開催地の旅館（？）には、阿翔の妹同然の存在（？）もしくは恋人（？）の夏夏（詹子萱／ジャン・ズーシュエン）がいたからビックリ！話の時系列がさっぱりわからなくなってきたが、とりあえず、それまでは2人だけのロードムービーだったものが、ここからは一転して「紅一点」の夏夏が加わったため、花火大会の見学は大いに盛り上がることに・・・。

ところが、本作で再三登場してくる回想シーンでは、アレレ、アレレ、花火大会の喧騒の中、阿翔はドーンという大きな音を立てた交通事故に遭遇することに。アレレ、アレレ、ひょっとして阿翔はこの交通事故で死んでしまったの？しかして、この花火大会はホンモノ？そして夏夏が存在や、天宇と夏夏との出会いはホンモノ？

2025（令和7）年8月20日記